

セッションNo.1の発表に対するコメント

榎本文雄

一 はじめに

私は、かねがね、シンポジウムやパネルディスカッションにおけるコメントーターの現状に大いに疑問を懐いている。それは、コメントーターと呼ばれているにもかかわらず、発表や報告に対する直接のコメントはほとんどなく、コメントーター自身の持論を披露することに終始するようなコメントーターをよく目にするからである。これなら、コメントーターではなく、発表者や報告者と呼ばれるべきであろう。コメントーターが発表や報告に対するコメントをほとんど行わないようなシンポジウムやパネルディスカッションは、シンポジウムやパネルディスカッションと呼ばれるに値せず、有名無実と断ぜられても仕方なからう。そのような理由から、本稿でも、できるだけ真の意味でのコメントーターに徹することとする。

仏教の文献学的研究の最も基本的な、否、むしろ最も重要な課題として、原典の校訂テキストの確立と並んで、原典テキストを構成する基本単位である個々の単語、特に所謂、仏教術語の正確な意味の解明が挙げられる。もはや、漢訳やチベット訳の理解を鵜呑みにしたり、註釈に全面的に頼る時代ではない。しかし、誠に残念なことながら、仏

教術語の意味や用法に関して、研究者相互の間で必ずしも共通理解がなされていないのが現状であり、これはある意味では実にゆゆしき事態である。原典の個々の単語の意味が間違つて理解されていれば、それに基づく一切の立論は砂上の楼閣に等しいものとなるからである。

そもそも、文献学者の研究対象である原典の作者（原典が編集作品である場合は「編者」と呼ぶべきであるが、今はこの編者も包含して、「作者」と呼ぶ）の頭脳にあるのは、中国人やチベット人による翻訳でないのは当然であるし、さらに、後代の注釈者の理解とも必ずしも一致しない。文献学者として真つ先に行わなければならないことは、できる限り、原典を作者の意図通り理解することである。そして、そのための王道は、作者と同時もしくはそれ以前に成立した典籍の内容を習得し、作者と文化教養を共有することで、文献学者の頭脳の中を可能な限り作者と一致させようと努力することである。

その意味で、今回、本大会の共同研究テーマに沿って、主に初期仏教文献における重要な術語の用法を考察した詳細な文献学的な研究発表が前田先生と並川先生からなされたことは、本学会にとって誠に慶ばしい限りではあるが、個々の内容を吟味すると、原典を作者の意図通り理解するという視点からは、いずれの研究発表にも課題が幾つか存在するように思われる。

二 前谷先生の研究発表

最初の前谷先生の研究発表は、釈尊の説法と仏弟子のめざまめの構造を *pra-kas* という動詞に着目して考察するものである。

前谷先生は、まず、pra-√kāsのpraが「強く」という意味を持つと断言し、それを踏まえて論旨を展開されている。しかし、例えば、Monier Monier-Williams, *A Sanskrit-English Dictionary*, Oxford 1899]の、動詞の prefixとしてのpraに「強く」という意味は登録されておらず、pra-√kāsのpraに「強く」という意味があると断言される根拠が提示される必要がある。

また、初期仏教聖典の古層では、pra-√kāsと結合する語はほとんど dhammaであり、後代に成立した文献（例えば Puggalapañāti）ではじめて pra-√kāsと brahmacariya が結合すると断言されるが、Pali Tipitakam Concordance の pakāseti の項目が示すように、Puggalapañāti のような後代の文献のみならず、より古層の散文のパーリ聖典一般においても、dhammaのみならず、brahmacariya が多く pra-√kāsと結合する。そもそも、brahmacariya が pra-√kāsと結合する場合は、dhammaは√disと結合するのび、この両者の配置の意味や、pra-√kāsと√disとの使い分けの理由が深く考察される必要がある。

さらに、Udanavarga 12.14d の prakāṣitaḥ がチベット訳では so sor rtog pa（通常、prati-√tikśの訳語）に相当することから、「蔵訳者は pra-√kāsに特別な認識を持っていない」と断ぜられているが、Udanavargaの現存サンスクリットテキストとチベット訳の原典となったサンスクリットテキストとはかなりの程度に亘って異同があったであろうことは既に明らかにされており（例えば、Lambert Schmithausen, “Zu den Rezensionen des Udanavarga,” *Wiener Zeitschrift für die Kunde Südasiens*, 14 [1970], pp. 47-124）、チベット訳者の見たサンスクリットテキストが prakāṣitaḥであった保証はない。

また、結論部分で「眼を有し灯火をかかげた釈尊が、聴聞者に対して教えを pra-√kāsすることによって、眼を持

たず灯火も携えていない聴聞者が」云々と論ぜられるが、テキストでは「眼を有する」聴聞者に向かって教えが *pa-*
ka- やれている。

さらに、コメンテーターからの提案として、本研究発表でしばしば言及された *brahmacariya* に関しては、仏教に先行するヴェーダ文献において、*brahmacariya* (*brahmacarya*) とは「学生が師匠の家で内弟子としてヴェーダを学ぶ修行」であることを想起すれば、本大会のテーマである「仏弟子ということ」に即した絶好の研究テーマとなりえると、私は提示した。

三 並川先生の研究発表

次に、並川先生の研究発表は、原始仏教におけるブッダと仏弟子の関係や仏弟子の意義を考察するものである。

まず、研究発表自体の中で弁明されたことではあるが、題名が「初期經典にみられる仏弟子の表現」である以上、散文中書かれた初期經典も扱うべきにもかかわらず、韻文經典のみしか取り上げられていない。

研究発表全体の主眼として、並川先生は、ブッダと仏弟子との関係を示す語として、*śasana* がほとんどブッダのみに用いられ、*anusāsani* や *anusāsati* が仏弟子のみに用いられることから、*anusāsani* や *anusāsati* は仏弟子がブッダに従属していることを示すと指摘された。しかし、従来から韻文經典の中でも最古の層に属すると並川先生が提示する *Suttantapāṭi* の *Parāyanavagga* において既に、仏弟子ではなく、ブッダについて *anusāsa* が用いられ、その他の韻文經典や散文經典においてもしばしばブッダについて *anusāsati* やその活用形が用いられている事実を考慮する必要があろう。

最後にコメンテーターからの提案として、本大会のテーマである「仏弟子ということ」に即して考えると、真つ先に「仏弟子とは何なのか」が問われねばならないこと、そしてこの問いは「どのような人が仏弟子、特に出家の仏弟子なのか」、言い換えると「出家の仏弟子とはどうあるべきだと仏典に記載されているか」、さらに言い換えると「仏典において出家の仏弟子はどうあるべきだ、何を求めるべき、何をすべきだとテキストに提示されているか」というような点に発展していくことを私は提示した。また、ブツダと仏弟子との関係については、例えば、*āyasma* や *avuso*、また *bhante* や *Bhagava* や *bho* などの呼び掛け語に着目して、弟子に対する呼び掛け、弟子からの呼び掛け、弟子同士呼び掛け語相互の間の意味や敬意の相違を考察することで、ブツダと弟子の具体的な関係の明確化が図られるのではないかと考えも示した。

四 フロアからの質問

フロアからの質問は前田先生の発表に対するもののみで、最初の質問者からは、掲げられたテキストとその訳文との間の齟齬が指摘され、また、*dhanna* の訳語として「教え」と「真理」の両者が使われることへの疑義が出され、最後に *dhanna* を「真理」と訳すことへの反対意見が表明された。別の質問者からは、釈尊の説法を聞くことで鳥肌が立つのはなぜか、という質問がなされた。

五 おわりに

昨年、私の勤務する大学で、ギリシャ古典の研究会に参加して、驚愕を覚えた経験がある。それは、若い研究発表

者が、自らが最も専門とする典籍を、何十年も前の邦訳そのまま何ら修正を加えることなく典拠として提示し、その点を私が質問すると、大家おぼしき研究者が、この訳は完璧な定訳であり、自分は常にそのまま使用している、と言いつ放った点である。

その時、私は、近代のインド学・仏教学がギリシャ古典学を模範として誕生したにもかかわらず、今も両者は別世界に在るような感を懐いた。少なくとも、私の専門とするインドの初期仏教文献では、前田先生と並川先生がこの学会でされたように、研究発表者がその都度新たにパーリ語などの原典を翻訳するのが良識ある態度である。既存の訳で完璧なものなど内外問わず何一つ存在しない。ギリシャ古典学と比べてインド学・仏教学はあまりに発展度が低すぎるためなのか、あるいはギリシャ古典学の現状の方に問題があるのか、ギリシャ語を読むことすらできない私には判断の仕様がなすが、インド仏教の原典が難解極まる代物であることは、確かであろう。